1 月 23 日のメッセージ

聖書：マルコによる福音書　1：　21－28

「権威ある新しい教え」

いよいよ、イエスの宣教活動が始まります。遍く世界へ広がっていくべき恵みの知らせは、当然、イエスと弟子たちだけに留まることはありません。また、内輪で恵みを独占することもありません。隣人へ、そのまた隣人へとその恵みは広がっていきます。

イエスが安息日に会堂で教え始められると、人々は驚きました(「人々はその教えに非常に驚いた。律法学者のようにではなく、権威ある者としてお教えになったからである。」マルコによる福音書 1:22)。すでにイエスがそのような立場にあったということは、ここで驚くべきところではありません。

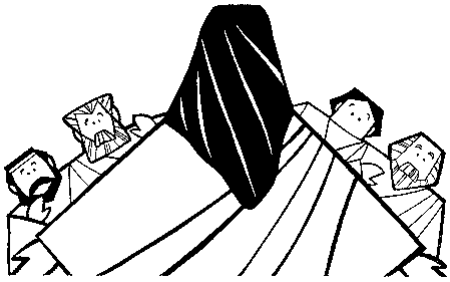
おそらく、別の人も会堂で教えていたことでしょう。他の人と比べてイエスの口から発せられる言葉が驚きに満ちていたということです。会堂に集うユダヤ人は、いつも聖書の朗読を通して神の言葉を聞かされていたはずです。今まで同じ言葉を聞いていたはずなのに、何が違ったのでしょう。

聖書は、神の言葉はいつもすぐ近くにあると伝えています(「御言葉はあなたのごく近くにあり、あなたの口と心にあるのだから、それを行うことができる。」申命記 30:14)。にもかかわらず、聞く側の都合で、その言葉は時に遠く、時に近く感じられます。また、同じ言葉だとしてもその時の状況次第で聞こえ方は違ってきます。一方、語る側の都合でも、その聞こえ方は変わるのかもしれません。調子の良し悪しが影響することもあるでしょう。ただ言葉の上辺だけをつくろうのか、それとも、その本質を語るのか。それによっても変わってくるでしょう。

神の子であるイエスの口から発せられる言葉には、確かな力がありました。非常に興味深いのは、そのイエスの本質に気づいているのが、汚れた霊だけだという事実です(「そのとき、この会堂に汚れた霊に取りつかれた男がいて叫んだ。『ナザレのイエス、かまわないでくれ。我々を滅ぼしに来たのか。正体は分かっている。神の聖者だ。』」マルコによる福音書 1:23-24)。これは、神の言葉の持つ真の力はありとあらゆるものに届くということを示しています(「主の御声は力をもって響き／主の御声は輝きをもって響く。」詩編 29:4)。

しかし、周囲の人々は目の前の出来事に驚くだけで、まだイエスの本質には気づいていません(「人々は皆驚いて、論じ合った。『これはいったいどういうことなのだ。権威ある新しい教えだ。この人が汚れた霊に命じると、その言うことを聴く。』」マルコによる福音書 1:27)。「御言葉はあなたのごく近くにあ」(申命記 30:14)るはずなのに、その本質からはまだ遠くにいるのです。

ただ、これまで聞いていた神の言葉と同じはずなのに、「権威ある新しい教え」と受け取ることができたということは、まだ次へ進む可能性があるということです。福音のもつ力を受け止め始めているのです。福音、それはユダヤ人だけでなく、全ての者の救いをもたらす真の力をもっています(「福音は、ユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも、信じる者すべてに救いをもたらす神の力だからです。」ローマの信徒への手紙 1:16)。その力の一端を感じ始めているのです。



何を聞き、何を信じるのか。何を見、何を頼りにするのか。今、私たちも問われています。